

俳句

大津俳句会

沿道の風軟かに野菊晴やわら のぎくばれ

岩崎由美子

茶の花やお地藏様を囲ひ咲きかこ

大塚喜久子

初鳴の光る湖めどし着水こ ちやくすい

岡崎 浩子

あれこれと思ひめぐらし夜長かな

佐賀 久子

山里の灯はつぽつ夕月夜あかり ゆうづくよ

佐澤 俊子

俳句

つのはな句会

それぞれの秋を演じて夜の電車

村田 健二

生涯掛けし老いの笑顔や平和賞

志賀 孝子

秒針の音さくらさと星月夜

田上 公代

シーラカンスの目覚めを誘う冬の雷

上杉 波

団栗や右往左往の背くらべ

矢嶋 道子

目覚めれば銀杏黄葉や良き風や

梅木トキエ

秋シャツの飛んで行きそうベランダで

塚本 洋子

秋の虹神の時間の短くて

柴田しのぶ

短歌

大津短歌会・野づかさ

われの名の一字「麗」を詠む歌の載る新聞を友は持ち来る

荒木 麗子

紛争でまたひとつ知る遠い地の「北オセチア共和国」よ

田中 玲子

みつしりと芽を吹く双葉玉レタスわれ指太く間引きがたしも

豊岡ミツル

朝の虹くぐるが如く長崎へ立ちたり小学六年生は

小平 善行

垂乳根の父母ねむる墓石は仄かに秋陽集めて温し

吉永 恵子

我が家のはらべこおおむし羽化したる後用なしの大鍋磨く

坂本 杲子

西空を染めつくしたる夕映えの七七才のひとひ暮れゆく

鞍 岳志

洗濯機炊飯器操作を懸命に九十才の夫は覚えむとする

山本 泰子

早朝の闇に雷鳴ひびきくるひと雨降れば秋くるか

高村 貴子

ひとひらの黄色いちよう葉はさみにき彼の思い出も琥珀色して

吉田 良子